

清流ニュース

発行所
八王子市安町 1-22-25
清流寺
清流ニュース編集室
電話 (042) 646-0287 (代)
FAX (042) 644-1164
http://seiryuji.jp.org/

平成二十六年 度 総 祈 願
佛立開導日 扇聖人 誕生 二百年 慶 讃
佛立開花運動 第二年度 御奉公 成就
本年度 自主 教化 誓願 達成 之 御 願
日序上人 御十七回忌 報恩 御奉公 成就
役中 後継者 養成、法灯 相統 促進

四月の御総講日

一日 十時	御修行日
七日 十時	バスデー総講 日序上人報恩祈念
十三日 十時	高祖御命日
十七日 十時	開導御命日
廿五日 十時	門祖御命日
十一日 十時	於 清流寺 高祖御速夜
十六日 十時	開導御速夜
廿四日 十時	門祖御速夜
三十日 十時	於 羽村別院 歡尊御命日

会議

一日 御総講後 役中会議
廿七日 午後一時 参事会
廿五日 御総講後 教区長会議

二月二十三日

門祖会盛大に奉修

柴崎日布導師ご唱導



奉修導師 柴崎日布導師



御導師方を囲み随伴参詣者の記念撮影

去る二月二十三日(日)に門祖会を厳修。盛岡・広宣寺からも遠路のところ随伴参詣をいただきました。
当日は晴天のお計らいの下無事に奉修させていただきましたことができました。
(詳細は二面)

四月十二日(土) 第三座 乗泉寺当番参詣

十二日(土)は本寺・乗泉寺への当番参詣です。
すでに各教区の将引ご奉公は済んでいますから、参詣申込みをされた方は、渉外部の指示に従って、当日は、集合時間等をしつかり守ってお参詣させていただきますよう。

五月四日(日) 大阪・清風寺団参 開筵式に参詣しよう

来る五月四日(日)大阪・清風寺の本堂落慶開筵式に当山からも団参をさせていただきますことになっております。
渉外部では三十名の予定参詣を計画しておりますが、まだ申込人数に至っておりませんから、各教区とも、もう一ふんばりして将引を徹底させましょう。

日序上人御十七回忌法要 参詣申し込み

来る六月廿四日(水)に奉修される当山先住権大僧正日序上人御十七回忌法要の参詣者を含め調査して報告していただくことになっております。
が、×切日は四月一日です。
一人でも多くお参詣して、先住への報恩謝徳の志をあらわしましょう。

朝参詣強調週間 四月二日(六) 第二連合担当

四月二日より六日迄、朝参詣強調週間で、担当連合は第二連合です。
四月二日(水) 日野教区
三日(木) 立川教区
四日(金) 大和教区
五日(土) 国立教区
六日(日) 京王教区

日序上人御十七回忌報恩(奉公御有志奉納者氏名)その五十四 (教区順。敬称略。順不同)
二十六年三月十七日現在
合計七五〇名、一、四九六口



本月の御妙判

骨惜しみをしない

秀句に云く、浅きは易く深きは難しとは釈迦の所判なり。浅きを去りて深きに就くは丈夫の心なり

(法華行者値難事) 縮 1024

秀句というのは伝教大師の「法華秀句」のことです。此の書は三巻に分かれ、法華経が余経に勝れている十点を挙げ、この法華経を信ずる者の心得を説いたものであります。この文の「浅き」とは方便

経の教えのことで、「深き」とは真実の教え、即ち法華経のことです。

余経つまり、法華経以前に説かれたお経は「随他意」と申し、法華経のことを「随意」というのですがこの語の場合「他」というのは仏の教えを受ける者のことであり、「自」というのは仏様御自身のことです。法華経以前に説かれたのは方便の教えと

申しますが、これは、皆聞く者の機根に応じて説かれたものですから「他の意に随つて説いた」と申し、法華経は仏様が自ら寛られたものを、そのまゝ説かれたのですから「自意のまま説いた」というわけです。

方便の教えは解し易く、真実の教えは解し難いのは当然であると申せますが、
「此ノ経ハ方便ノ門ヲ開キテ真実ノ相ヲ示ス。是ノ法華経ノ蔵ハ深固幽遠ニシテ人ノ能ク到ル無シ」(法師品)
と説かれて、また「難信難解」とも示されます。
併し、仏道修行の究極の目

的である成仏が、出来ないならば易しい方便教をいくら行っても何もならないし、たとえ難しくても、それが仏様の御本意ならば、敢えてさせて頂くという精神が法華経の心でなくてはなりません。

成仏が出来るなら、それが功德になるなら、それが世の為、ひとの為になるなら、どんな骨の折れることでも、させて頂くというのが菩薩行の真髓であります。
凡夫が未法で、どうすれば御利益が頂けるか、という基本が、法華経如来寿量品に説かれています。それは、「広供養舍利」からは

「二心欲見仏不自惜身命」というふうに信仰が深まってくる時、御利益が頭われるというのであります。

御法のためならば「自ら身命ヲ惜シマズ」というのですから「いのちを惜しむ人たちのいのちを惜しむを惜しむ人たちのいのちを捨てるものか」と御教歌下されてあります。
「いのち」を惜しまないというのには、口では簡単に云えますが、いざ実行となると、仲々そうはいきません。それどころか、「いのち」より軽い、財を惜しんだり、骨折りを惜しんだりするようでは御利益の

頂けるわけがないというのであります。
未法こんにちの「不自惜身命」というのは、それが功德になるのなら骨の折れることから逃げないで、敢えて、骨惜しみをしないで御奉公させて頂くことと決定することに外なりません。

法のためいのち捨すに
浄土参拝うち忘るとは
と御教歌下されてあります。
成仏の大果報を頂くため、そして現世安穩後生善処のお計らいを頂くためには、日々の御信心御奉公に骨惜しみをしないという心得が大切です。